

愛媛大学附属図書館 2005年(開学記念日事業)企画展

愛媛県における明治の新群像

- 世紀堂文庫の世界 -

会期 平成17年11月11日(金)～11月17日(木)
午前10時～午後5時(土・日 開館)

基調講演・シンポジウム

会場 総合情報メディアセンタ - メディアホール

日時 平成17年11月11日(金)午後1時30分～

企画展示

場所 附属図書館3階 ラウンジ(エレベータ前)

ご あ い さ つ

愛媛大学学長 小松 正幸

この度、愛媛大学附属図書館2005年（開学記念日事業）企画展として、愛媛県における明治の新群像 - 「世紀堂文庫の世界」 - を開催することになりました。

「世紀堂文庫」は、日本の文化史の空白を埋める菱田正基と中国・旅順に彼が構えた「世紀堂」という文化サロンに集う文人の貴重な未発見資料であり、愛媛県における明治の新群像を探る新たな文化財です。

本学附属図書館では、電子図書館の取組みとして、所蔵する貴重資料のデジタルコンテンツ化を図り、地域社会への情報発信を行っております。愛媛大学では、地域社会や産業界との連携や交流の強化推進を図っておりますが、図書館においても地域の開かれた文化拠点としてその役割を果たしていくことが益々重要になってきております。

今回、開学記念日にあわせて、基調講演・シンポジウムを開催し、さらにご理解を深めていただく機会を設けました。この企画展を機に、愛媛県の豊かな文化に対する理解が一段と深まれば、これに過ぎる喜びはありません。

結びにあたり、本企画展のために、ご尽力いただきました関連部局、関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

また、お忙しいなかご来場いただきました皆様に感謝するとともに、益々のご支援をお願いいたします。

平成17年11月11日

概 説

世紀堂文庫 (Millennium Hall Collection) の世界

福田安典 (附属図書館デジタルコンテンツ委員会)

愛媛大学は、愛媛県松山市に位置しながら、愛媛や松山に関する貴重文献の収集において出遅れていました。しかしながら、書家にして美術品としての価値も高く、また、松山史料としても一級資料である三輪田米山日記、蔵沢や樵眠などの絵画資料、愛媛の源氏物語研究資料である堀内文庫、西条誌、今治の江島家文書など、附属図書館や教員及び附属図書館の組織であるデジタルコンテンツ研究会によって収集の努力を続け、その公開に努め、自治体との共同事業にも成功し、外部の高い評価を受けています。

ただ、松山に位置しながら、正岡子規を中心とする近代資料の収集において後手であることが懸案でありました。その中であって、教育学部の研究チーム (代表：高橋治郎教授) が、菱田正基という、松山を代表する近代文化人でありながら、従来、看過されてきた資料群の収集に成功しました。この収集を受けて初めて、愛媛大学附属図書館が近代貴重資料を所蔵することになりますが、この菱田関係文献は、愛媛大学に収集される前に流失がありました。このたび、その流出文献を所持する高橋俊夫氏との間で、無事、寄託の話が整い、ここに愛媛大学所蔵資料と、高橋氏寄託分とをあわせて「世紀堂文庫 (Millennium Hall Collection) 」と名付け、今後の愛媛大学の研究に供し、またその公開によって愛媛大学の評価を高めていきたいと思いません。

菱田正基 (1884 - 1952) は、松山藩士菱田中行の子息。菱田家は、正岡子規が常磐宿舎にいたときの寮長内藤鳴雪や、松山市の市章の作成者で画家の下村為山と縁戚関係にあります。いわば近代愛媛の文化のもう一つの発信地とってよいのかもしれませんが。父の菱田中行は、あまり知られていませんが、四国に初めてキリスト教をもたらした人物として注目されています。その子息である正基は、キリスト教と教育に当初は関心を持ち、愛媛師範大学を卒業後、満州旅順で尋常小学校の教師となりました。その意味では愛媛大学の同窓でもあります。正基の幼少の頃、安倍能成と友達で、長じては徳富蘆花との交遊が知られ、また、娘が桜井忠温の子息と結婚したために、忠温とも交遊がありました。

旅順においては、自身の名をもじって「世紀堂」というホールを構え、そこは近代文人たちのサロンでありました。終戦後、松山にもどり、俳句や画で活

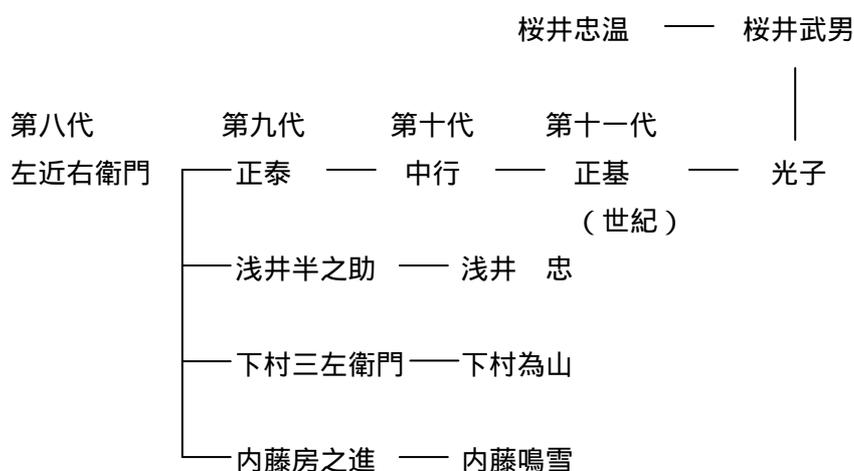
躍し、松山子規会の幹事までも務めました。

世紀堂文庫は、その交遊を反映して、いずれも貴重な未発見資料です。徳富蘆花の自筆資料をはじめとしまして、下村為山の書と絵画、内藤鳴雪の書、安倍能成の書、反戦を貫いた世基と同じく反戦思想を持っていた水野広徳との非戦のメッセージを持つ短冊、忠温の修業時代の初期絵画などで構成され、いずれもが、資料的、美術的価値が高く、愛媛の近代文化の馥郁たる豊かさを醸し出しております。

今回の展示では、その一部を公開しました。その概要は『近代愛媛の新群像 - 「世紀堂文庫」の世界 - 』（シード書房）が2006年に刊行が予定されています。

系 図

菱田関係略図（『花桔梗』に拠り、関係人物だけを抜き出し、必要に応じ一部手を加えた



年 譜

菱田正基 — 世紀堂の主 —

正基は、その中行の子として生を受けた。父がすべてを抛ってキリスト教に投じた時の今治で生まれた正基は、当然ながらキリスト教と教職者としての側面が強い。しかしながら、正基とその父・中行の大きな違いは、正基はキリスト教に対してさほどのめり込まず、

「古仏」「世紀」という号を持ち、「黒煉瓦の家」に『世紀堂』と名付けた文化サロンを開き、俳句、短歌や絵画、篆刻という文芸に生きる意味と、同時に戦時に生きる近代文芸人の苦悩を持っていた点にある。父の従兄弟たる内藤鳴雪や下村為山は、その従兄弟すなわち中行よりも正基の方に目をかけていたようであるが、それも正基の文芸的素質を愛していたがゆえであり、その悩める近代文化人の精神に惹かれていたからであろうと思われる。徳富蘆花が日記中に「馬鹿菱田」などと愛憎なかばの罵倒の言葉を残しながらも、交流を続けていたこともまた同じ理由ではないだろうか。

明治十七年八月十九日	今治に生まれる。原籍は松山市北京町。
明治二十一年	父ともに松山へ。
明治二十七年三月	松山尋常小学校卒業。
明治二十八年	父、中行が失明。正基は下村為山の勧めにより俳句を詠む。以後、松風会にも出入りする。
明治二十九年三月	松山高等小学校第二学年修業。安倍能成と出会う。
明治三十年三月	東京府尋常師範学校附属小学校高等科第二学年修業。
明治三十一年三月	松山高等小学校第三学年修業。
明治三十四年三月	愛媛県立松山中学校第一学年修業。
明治三十四年十月	愛媛県師範学校講習科修了。
明治三十五年	雑誌『中学世界』に句を投稿、巖谷小波の撰で「天位」に選ばれる。 『海南新聞』の川柳欄に参画。
明治三十九年三月	愛媛県師範学校本科卒業。 この頃、東京に内藤鳴雪を訪ね俳句の指導を受ける。鳴雪の命名により「世紀」の俳号を使い、松山の句会に参加。
明治三十九年三月	愛媛県温泉郡素鷲尋常小学校訓導。
明治三十九年六月	第十一師団に六週間現役兵として入営。
明治四十年九月	キリスト教系の松山夜学校（現松山城南高校）に勤務。
明治四十二年五月	同校退職。
明治四十二年五月	関東州小学校訓導に任じ、旅順第一尋常小学校本科正教員。
明治四十三年一月	母クマの死に接し、悩みを徳富蘆花に手紙でうちあける。以後、蘆花との交流が始まる。
大正二年	徳富蘆花が妻子を連れて旅順、大連へ。正基と初対面。正基、蘆花のために、髑髏の印を自ら刻み、贈る。
大正三年四月	旅順第二尋常小学校訓導。父・中行が旅順へ来る。
大正七年	大町桂月から書を贈られる。
大正十年	三月に桜井忠温を訪ねる。九月より一年間の内地留学、渋谷

に住む。下村為山，内藤鳴雪，河東碧梧桐と頻繁に交流。
この頃，松山中学出身の吉田清太郎の学説に傾倒。

大正十一年八月 南満州教育会教科書編輯部委員。
大正十二年十二月 大連第六尋常小学校本科正教員。
大正十四年三月 南満州教育会教科書編集部委員を辞して，大連図書館へ。
大正十四年四月 勲八等に叙せられ瑞宝章を受ける。
大正十五年五月 関東庁博物館書記（旅順図書館）。
昭和二年六月 関東庁経済調査会書記。
昭和三年三月 関東庁雇。
桜井忠温が『草に祈る』の取材のために来る。正基同道。正基が「青村」として描かれる。

昭和三年十二月 父・中行の死去。
昭和四年十二月 安倍能成，旅順の世紀堂を訪問。
昭和五年一月 長官官房文書課勤務。
昭和六年五月 内務局殖産課兼務。
昭和七年三月 内務局商工課勤務。桜井忠温の子，武男が旅順に，以後親しく交わる。

昭和七年七月 長官官房調査課勤務。
昭和八年五月 関東庁図書館雇。
昭和十年二月 桜井武男と，正基の娘の光子が結婚。
昭和十一年四月 旅順高等公学校雇。
昭和十四年六月 ハルビン・ムーリン公社本社勤務。
昭和十五年五月 関東州清涼飲料水製造販売実業組合勤務。
昭和十七年四月 大連製氷販売組合庶務主任。
昭和二十二年三月 松山に帰る。以後，松山では「世紀庵」と名付けた家に住み，ユネスコ協会や松山子規会幹事などを務める。

昭和二十二年七月 安倍能成と再会。
昭和二十七年十一月二十六日 正基逝去。享年六十九。
昭和二十八年 正基一周忌。安倍能成，田中実乗，素山等が参加。

『近代愛媛の新群像』（平成18年3月刊行予定・シード書房）

展示出展一覧

No.	資料名	形態			資料番号
		軸装	額装	折帖	
1	「世紀堂」扁額		額装		T001
2	柿図（下村為山）	軸装			T002
3	水野広徳短冊		額装		T003
4	安倍能成書		額装		T004
5	内藤鳴雪書	軸装			T010
6	徳富蘆花書状			折帖	S003
7	菱田正基一周忌寄せ書き	軸装			S012
8	「詠忠臣良雄」書	軸装			S013
9	長屋忠明短冊			短冊	「富士の山～(S018)」
10	長屋忠明短冊			短冊	「雲の上に～(S019)」
11	長屋忠明短冊			短冊	「吾れひゞに～(S020)」
12	長屋忠明短冊			短冊	「山高く～(S021)」
13	長屋忠明短冊			短冊	「百年も～(S022)」
14	長屋忠明短冊			短冊	「異国に～(S023)」
15	長屋忠明短冊			短冊	「泰然と～(S024)」
16	長屋忠明短冊			短冊	「空にまふ～(S025)」
17	長屋忠明短冊			短冊	「富士の山嗚呼(S026)」
18	『満州を偲びて』			折帖	S045
19	「母子図」松浦巖暉加筆	軸装			P004
20	「宴の図」	軸装			P009
21	南岳筆「羅漢の図」				P012
22	松浦巖暉翁筆「勸進帳の弁慶」				P016
23	七十七翁養神斎樵眠筆「孔雀の図」				P018
24	円山翁遺墨「郭子儀和樂之図」				P019
25	応挙筆「王西母」				P020
26	ショウビンと虫				P024
27	樵眠筆「松と鶴」	軸装			P030
28	「夫婦鶴」	軸装			P031

内 容

1) 「世紀堂」扁額

菱田正基は旅順で文化サロンを形成し、「世紀堂」と名付けていたらしい。この扁額は正基と縁戚関係にあり、俳画で有名な下村為山の筆による。

2) 柿図 下村為山

下村為山は特に柿の図が有名であるが、この柿図はやはり絵心のあった正基に為山が贈ったものと言われている。為山は正基にしばしば絵の手ほどきをしていたことが知られている。

3) 水野広徳 短冊

反戦の軍人として知られる水野広徳と菱田正基の絶妙のコラボレーション。晩唐の漢詩人曹松の七言絶句「一将功成万骨枯」によって、広徳が「一将功成」と書き、絵をよくした正基が旅順の「表忠塔」の絵を描き、反戦のメッセージや自身の運命を示した。

4) 安倍能成 書

昭和4年(1929)12月23日、安倍能成は43歳の誕生日を旅順の「世紀堂」で迎えた。この時の能成は帝国大学教授であったが、小学校教員の菱田宅で誕生日を迎えるのは、両者が松山高等小学校の同級生であったからである。能成は正基を生涯の友として、後に両者の社会的地位には大きな隔たりがあっても、その交遊は続いたようである。

千里遇故友 偶呈生誕日 昭和四年十二月廿三日 於旅順世紀堂 能成

5) 内藤鳴雪 書

正岡子規門の重鎮、内藤鳴雪は正基と縁戚関係にあり、正基に俳句の手ほどきをしたといわれている。正基の俳号「世紀」の名付けの親でもある。この軸は上に漢文を知らないことをからかう鳴雪の文章に、正基自身が自画像を描くというユーモラスなもので、両者のほのぼのとした交遊がしのばれる。

突兮兀兮咄哉不知曉漢 為菱田子 七十六鳴雪

6) 徳富蘆花 書状

徳富蘆花と菱田正基

徳富蘆花は明治を代表する文学者です。特に『不如帰』は50万部を超えるベストセラーで、本嫌いの市井の人々も、浪さんと武男の悲恋物語を知らぬ者はいなかったと言われています。高浜虚子は思わず徹夜してしまい、「読過の際、しばしば涙のこぼるるを覚えず、読み終わって純潔の血が湧く」と蘆花に手紙を出したほどでした。蘆花は、またパレスチナ順礼、トルストイを訪問、トルストイに倣い「美的百姓」を実践するために千歳村柏谷に住居を構えるなど、奇行の持ち主としても有名でした。

徳富蘆花と菱田正基の出会いは運命的なものでした。蘆花は青年時代に今治にいた時期があったが、その明治18年(1884)の蘆花の今治教会での活動時期に、やはり今治で布教活動にあっていた菱田中行(正基の父)と面識を持ちました。翌年に蘆花は京都に帰ってしまいますので、両者の接触は短い時間で終わったようです。

後年、『不如帰』で一躍有名になった徳富蘆花は、キリスト教に基づく反権力主義的な言動で異様な人気を集め、多くの若者が蘆花に手紙を出し、人生の悩みを相談していました。その一人が菱田正基です。愛媛大学「世紀堂文庫」所蔵の今回の展示書簡は、その正基のファンレターに蘆花が書いた返事です。以後、蘆花と正基の文通が続いていきます。大正2年(1913)に蘆花は妻愛子と姪の鶴子を連れて旅に出ますが、旅順に立ち寄ったところ出迎えたのが旅順小学校の教員をしていた菱田正基です。蘆花と正基はこの時に初めて顔を合わすのですが、乗り合わせた馬車の中での雑談中、正基の父が中行であることを蘆花が知り、大変驚きました。そして正基の案内で蘆花一行は旅順を巡りました。その旅の終わりに、正基は蘆花にみずから刻んだ髑髏印と安重根の書を贈ります。

以後も両者の交流は続いていき、やがて疎遠になっていきますが、両者の出会いが互いに影響を与え合ったこと、特に蘆花が菱田から影響を受けたことなどは、従来の文学史に説かれたことはありませんでした。

7) 菱田正基一周忌寄せ書き

8) 「詠忠臣良雄」書

忠臣蔵関係資料「大石内蔵助賞賛文」について

この作品 S013 は、赤穂浪士および大石内蔵助を賞賛した文章であると思われる。菱田家と赤穂浪士のつながりは、元々菱田家が松山藩に仕えていたことより始まっている。元禄十五年の吉良上野介邸への討ち入り後、江戸松山藩邸に大石主税(大石内蔵助実子)を筆頭に一〇人が預けられた。元禄十六年に全員が切腹となり、現在イタリア大使館となっている藩邸には、一〇人の切腹を記念する碑が建てられている。赤穂浪士と松山藩の関

わりについては、正基の先祖である松山藩士菱田権太夫が書写した「聞書」に記録がなされているようであり、桜井武男氏の所蔵となった後に赤穂市史編纂室に寄贈されている。この作品は筆脈が難解で判読できない部分も多いが、判読できない部分を「 」とし、釈文を掲載してみる。

赤石西公赤穂城君恩 木石 無奈 石」終招鉄提封万石食顛刮我 柱石 苟」生繕石
永々人矚 目聊旦以玉千石聊濕綿」石之殤縛汝色一独石門備稍緩 石一発」仇 獲括擊
石階 君葬甘 如石 了臣 嗟乎美那千載金石存児 童走争誰不去」大石 評中臣良雄
柴石字乎作 祝菱田生

一見してわかる通り、キーワードは「石」である。合計十五回使用されている。これは赤穂浪士のリーダーであった大石内蔵助の「石」字に引っかけて書かれたと推測できる。文中に書かれる「良雄」は諱、内蔵助は通称。文章の完全な読解はできないものの、「争誰不去」などの語句から、赤穂浪士や大石内蔵助を賞賛した文章（あるいは詞）であろうと思われる。

9) ~ 17) 長屋忠明短冊

世紀堂文庫の短冊からみる正基の交遊

ここでは世紀堂文庫所蔵の短冊二〇点余によって菱田中行、正基親子周辺の交友関係を概観していきたい。一々断らなかつたが、以下の記述はおもに『花桔梗』および『続花桔梗』によっている。

まず、初めに東雲学園の設立に尽力した人物としても知られる長屋忠明の短冊九点を紹介したい。

富士の山こゝろにかゝる雲もなしのとけき空に有明の月 忠明 <S018>
雲の上にたつみの神の名をとほふしのみやまとわれはこたへむ 忠明 <S019>
吾れひゝに三度わか身をかへり見てくらへてみまし不二の神山 忠明 <S020>
山高く雪清ければちりもなしかみの御園と見ゆる不二の嶺 忠明 <S021>
百年も千年の後も万代も君か御稜威を祝ふ不二山 忠明 <S022>
異国にふしてふ山のありとせは日本の不二は不二の王なり 忠明 <S023>
泰然と亜西亜の空に聳へけり五大海中第一の山 忠明 <S024>
空にまふ雪やこの花さくやひめひめのすかたかふしの曙 忠明 <S025>
富士の山嗚呼不二の山ふしの山天上天下独斯の山 忠明 <S026>

すべて富士に寄せた歌であるが、その内容からは制作時期を知り得ず、長屋忠明の伝記と菱田中行との関係によって、明治一六年（一八八三）頃のものかと推しておく。『松山

東雲学園百年史』(一九九四年)によると、明治一二年、今治教会の初代牧師伊勢時雄が伝導のために松山放龍寺で演説会を行ったときの松山での宿が長屋忠明宅であったという。伊勢時雄は今治に戻ってから長屋宅に聖書等を郵送したともあり、長屋忠明はこの頃にはキリスト教に関心を持っていたらしい。長屋忠明と菱田中行は松山藩士として知己の仲ではあったが、この頃、キリスト教を通して近しい関係にあったことが想像され、『今治基督教会沿革史』には、明治一六年八月八日、長屋忠明夫人およびその娘は、菱田中行宅で伊勢時雄より洗礼を受けたとの記事も記されている。ただし、長屋忠明の受洗は『松山東雲学園百年史』によると、政界の第一線を退いた頃だという。「はじめに」にも記されたように、菱田中行は松山の地にキリスト教をもたらした人物であり、彼自身は『続花桔梗』巻末年表によると明治一六年に受洗している。『続花桔梗』本文中には明治一四年に受洗とあるが、『花桔梗』に明治一六年六月には、中行の夫人クマも今治において、家族とともに伊勢時雄より洗礼を受けたと記されており、こちらを採るべきであろう。菱田中行が洗礼を受けた翌、明治一七年八月一九日には菱田正基が誕生した。

18) 満州を偲びて

(裏 図二)

「奉天の支那街にて 忠温」

『忠温全集』第四巻に、「満州遍路」(昭和二年の紀行文)がある。その中に、「奉天駅へ下りる...場内へ入ると、ほこりが濛々と渦巻く。...馬車がゾロゾロと埃の中を練つて行く」とあるが、絵はこの時のものと思われる。

この絵には、「洋廣襪貨」の旗が描いてある。「洋廣」は洋品のこと。もと広東経由で輸入されたからこういう。「襪」は「雑」の本字である。ちなみに、「橋中佐」挿絵にも「遼陽の物売り」があり、こちらは「永盛恒記」の旗が描かれる。さらに『画集』を見ると、「遼陽城の物売り」(昭六 付図2)の絵があり、ここにも同じ「永盛恒記」の旗の絵が描かれている。当時、街でよく目にしたものなのだろう。忠温はすぐ興味を覚えたと思われる、この種の旗印の絵を好んで描いたのである。興味深いのは、これらの旗の文字が、三枚ともすべて鏡文字になっているということだ。たまたま三枚とも旗が裏返しになっていたからというだけではあるまい。ここに意図したものは何なのか。左手で鏡文字を描くというのは、いわば不自由さの極みである。戦争で身体に障害をもってはいるけれども、今の自分には絵が描けるという喜びがある。左手で鏡文字だって描けるぞ。そうやってわが身の悲しみを乗り越えようとする、忠温の文人としての生き方が伝わってくる。

またこの画中には、門柱の上に獅子が描かれている。『画集』にも、獅子像図(昭六 付図3)があるが、中国らしい光景に筆が動いたのだろう。もう一つ注意すべきは、物売りと馬と一緒にそこに描かれている点である。こういう絵を描くときの忠温は、満州にたまらないほどの魅力を感じていたのかと思う。それは満州に渡る前の心情について、忠温がこう

記していることから分かる。

思いおこせばもう二十年になる。…今再び満州の地を訪れることには深い感慨を感じる。…そして自分でスケッチをする，私としても満州を訪れることは，これが最後だろうから，心ゆくまで足をのばして懐旧の情に触れてくるつもりだ。

(「草に祈る」の執筆経緯『大阪朝日新聞』昭和二年七月十九

日付)

ちなみに『画集』には，「串飴売り」の絵もある。私も中国滞在中よく道ばたで目にする光景で，これが無性に童心をそそられる。人間くさい生活の一齣に，忠温も絵心をかきたてられただろう。

さくらいただよし 桜井忠温の模写絵

19) 「母子図」^{まつうらがんき}松浦巖暉加筆

絵柄から推測して，この模写の粉本は^{もり た しゅうみん}森田樵眠のものと考えられる。左下には「明治二十六年写之」とあり，また右下には，忠温自身が晩年，作品整理の際，左手で書き添えた「師並忠温筆」の字と印がある。

筆跡から見て，忠温が親子の図のほとんどを描き，巖暉が筆を加えたのは下部の籠や紅葉の着彩の部分であろうと想像される。紅葉狩りの親と子の表情の流暢な筆さばきに，すでに四条派の絵の筆勢になじみ始めた感があり，この作品と同時期に描かれたものに唐美人を描いた素描の小品もある。特に絵の大半を占める着衣の線は，まだ粉本にある形状に似せようとした運びが見られ，初期の模写の初々しさの感じられる作品である。

20) 「宴の図」明治二七年一月

やわらかい描線と片ぼかしの墨線による清新な写実，川辺の春の宴の華やいだ絵柄から推して，森田樵眠の絵を模写したものであろう。裏面には晩年の手になる制作年が書かれてあり，入門後に始めて迎える正月の，画塾での書初めとして描かれたと見られる。

前記作品に比べ，衣の筆勢などはそれぞれ部分的に納まり，緩みさえ感じさせるが，全体に自由闊達に描かれている。杯を交わす人物の衣や背景の梅の筆致は，手本から出て創作的であり，女官の衣の線は髪に重なるほど奔放である。

忠温は最初から色彩に強い関心を寄せていて，この模写も着彩に主眼が置かれている。大振りな衣の面から木々や模様の細かい描写にいたるまで，統一よく配色されていて忠温

の色彩感覚のよさが感じられる。

この模写は、粉本の敷き写しによって描かれたものでなく、臨写したものであろう。入門間もない忠温に、厳しい筆法の研究を強いることより、関心のある粉本から自由によさを発見させ絵心を育てようとする師巖暉の教育方針が窺えて興味深い。

2 1) ^{なんがく}南岳筆「羅漢」(裏面に南岳蔵) 明治二七年三月写

粉本になった南岳とは渡邊南岳のことで、『日本書画骨董大辞典』によると「名は巖，字は維石，南岳は其の号，京都の人，画を円山應挙に学び後尾形光琳を慕う，筆情繊軽にして婦女及び鱗魚を画に巧なり，故に聊か円山風と異なるものあり，没す文化十年正月，年四七」とある。京都の四條派岡本豊彦に学んだ樵眠の粉本より写されたものと思われる。

羅漢の剃髪以外は淡濃二色を重ねた大振りな線で写し取られている。南岳の絵の線にある

2 2) 松浦巖暉翁筆「勸進帳の弁慶」 明治二七年九月中旬

作品の裏面には、「明治二七年九月中旬」「師松浦巖暉翁筆 京都第一回博覧会への出品」とある。

博覧会とは、明治政府が国内産業振興の目的で開いた「内国勸業博覧会」のことで、第一回は東京上野で明治十年（一八七七）に開かれている。京都で開かれたのは第四回の明治二八年であるから、この絵は、師である巖暉が、第一回内国勸業博覧会に政府の要請を受けて出品した『勸進帳の弁慶』の下絵を手本にしたのではないかと解釈できる。

弁慶の視線や足元の緊張感に特に気を配って描かれている。下絵だけに説明的とも見えるほど衣装の細部の形まで描きとめられているが、模写にあっても全体の構成美は失われていない。

師自らの作品を模写させるほど、師の忠温に寄せる期待の大きさを感じることができるが、以後の忠温の模写も師に応えるかのように益々熱を帯びたものになる。

巖暉の現在残る作品が少ないだけに、この模写は帰松前の巖暉の作風を知る上でも貴重な資料である。

2 3) 七十七翁養神斎樵眠筆「孔雀の図」 明治二七年写

愛媛大学が所蔵する忠温模写作品で、これほど着彩に主眼をおいて描きとったものはなく、完成度の最も高い作品である。当時高価な顔料も使われていて、絵の修行もいよいよ佳境に入って、充実した状況にあることを窺わせる。

頭部の装飾的形態を写す慎重な線から、長刀尾の流暢な線、近景の牡丹の活写された均質な線など、優れた技量で森田樵眠の絵の筆致の妙を描きとっている。

七十七翁養神斎樵眠と写されており、樵眠最晩年の作である。比較的粗い筆使いの早描きの絵の多い中で、特に濃密に描かれたこの絵は、巖暉の所有する作品のうちで最も大切

に扱われた粉本の一つであろう。

樵眠は、今治地方絵師山本雲溪とならび賞せられる絵馬の多い作家として名高いが、掛け軸、ふすま絵として現存する作品が少なく、樵眠の多様な作風を伝える貴重な資料でもある。

右下隅に着彩の要点を書き記した忠温のメモ書きがある。顔料に加えて、色の重ね方や実物と異なる点など、後の制作の手だてとするもので、忠温の画家への意気込みが感じられる作品でもある。

24) 円山翁遺墨「郭子儀和楽之図」明治二七年十一月

25) 応挙筆「西王母」

裏面に「圓山翁遺墨 郭子儀和楽の図 明治二十七年寫之」とあり、この模写に類するものとして、やはり応挙の原画になる「西王母」の模写がある。いずれも白描であり、当時の人物模写の手法を見る上でも興味深い。

頭部や文様は、かなりの修練を裏付ける淡墨の細い均一な線で描き取られている。これらを最初に描いた後、流動的な衣装の形態を、比較的自由的な感覚的な線で加筆し、絵全体をまとめている。

二つの対照的な手法は、おそらく粉本のみならず許されたたものであろう。粉本は、画家が絵を生業としていく上で必須のものであり、その数を蓄えることも大切な仕事であったことから推して、忠温の画家への志の強さもうかがえる資料である。

応挙が安永四年に描いた「郭子儀図」(三井文庫蔵)に、この粉本と図柄もその大きさも全く同じものを見ることができる。忠温の模写絵では特に衣装の線が、さらに装飾的に付け加えられているが、応挙のこの作品の原画となったものから、次々と粉本がつくられていったことがしのばれ興味深い。

26) ショウピンと虫

忠温模写絵の収蔵品には絵の一部を抜き写した小品五点が含まれている。これもそのうちの一つで、着彩を主に、臨場感まで写し取った作品である。

模写の日付も粉本も明らかではないが、川辺の情景を描いた大作の一部であろう。粗描きの木の葉のほどよい間の中の、虫とカワセミの端的な表現が見事。

27) 樵眠筆「松と鶴」

28) 樵眠筆「夫婦鶴」

愛媛大学所蔵の忠温の模写絵のうちで、一幅の絵としての描かれた唯一の作品である。模写年の明記はないが、明治27年の終わりから、翌年の年頭にかけて制作されたものだろう。樵眠の名と落款まで写されていて、樵眠の絵の空間処理も含めた全体の構成の妙を

学び取ろうとする意図が感じられる。

この絵の直前に描かれたと思われる鶴の絵も残されている。いずれも樵眠の描いた夫婦鶴を手本としたものであり、軽妙な羽毛の描写や調墨の仕方までこの作品と全く同じである。しかし後者では、絵作りより二羽の形態の連続した筆さばきや細部の描写の仕方に着眼して学び、それらを踏まえてこの制作に至ったことが容易に分かる。

白い羽毛の色と空間表現を兼ねるバックの微妙な墨の処理、尾羽の淡墨に片ばかりの濃墨を重ねた筆さばきや、墨の乾きの頃合を見て速写される鶴の量感をつかんだ胴体の線の運びにも、忠温の技術の高さが感じられる。

上方の朝陽から手前の足元の着彩の仕方にまで、樵眠の絵の持つ瀟洒な空間感が映し出されていて、忠温の入門僅か二年間の修行での驚くほどの上達振りを、この絵は余すところなく伝えている。